鬼がかってる異世界生活

A_Meyyyyy

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

レムとラムの弟君を入れてみたお話

初めてではありますが、出来るだけいい感じにしていきますのでよろしくお願いします。アニメは見たことがありますが、小説等は未読ですのでやや間違った設定を作ってしまうかもしれませんがその時はご了承下さい。

目　次

姉様、姉様、プロローグらしいのです！　1
姉様、姉様、お客様が来たらしいのです！　4

姉様、姉様、プロローグらしいのです！

あるところに3人姉弟が居ました。その3人は、産まれた時は忌み子として殺されそうになりましたが、男の子と1番上の女の子の素質が高く生かされました。
そうして3人は両親と仲良く暮らしていたのです。

しかし・・・幸せな日々は経った一夜にして無くなってしまうのです。

桃髪の少女は焦ったように叫びます。
ラム「レム、シャル、早くこっちに来なさい！」
青髪の少女は金髪の少年の手を引いて桃髪の少女の言う通りに走っています。そして青髪の少女は、泣いている金髪の少年を励ましながら自分も泣かないように耐えています。

そうして走って行く内に人気のないところまで来れました。
ラム「ここまで来ればもうアイツ等が来ることはないはずよ。」
桃髪の少女、ラムは2人に向かって安心させるように言います。
レム「姉様、これから私たちはどうなるのでしょうか。私のせいで姉様の角が折れて、しまって・・・シャルにも無理をさせてゲートが使えなくなってしまいました・・・・」
青髪の少女、レムは2人に向かって心の底から後悔したような悲しそうな声で謝ります。
シャル「ぼくは、らむねーさまと、れむねーさまがぶじならそれでだいじょーぶだよ。おとーさまとおかーさまもいってたもん、くるしいかもしれないけどいきていればいいことはたくさんあるって、、だからそんな悲しそうなかおしないで、れむねーさま。」
金髪の少年、シャルは逃げながら泣くのをやめていました。その言葉は2人に心配させまいと少年なりの精一杯の気遣いのようなものでした。
ラム「シャルの言う通りよ、レム。生きていれば良いことが必ず起きる、だから絶対に生き続けるの！それがみんなに対する今できる精一杯のの弔いになるから！」
レム「ねえ、さま、、しゃ、る、、わかりました。私、もうこんなこと言いません。生きましょう、必死に、死んでしまったみんなのためにも！」
レムもラムとシャルの言葉のお陰で少しずつ元気を取り戻していきます。ラムと

シャルも、レムの決意に同意する様に、
「「うん！（ええ！）」」
と言います。

それから暫くし、ロズワールという男の人に拾ってもらい、その恩返しとして3人は使用人という形で頑張っていくことを決めました。
そうした中で様々な人に会っていきます。時に銀髪のハーフエルフの少女に、時に金髪の少女の姿をした精霊に、時に赤髪の剣聖に、時に青髪の騎士に、時に猫耳の騎士に、様々な出会いを得て3人はより一層美しく可憐に育っていったのです。

そこからさらに月日が経ち・・・・・・・・・・

黒髪のお世辞にも整っているとは言い難い青年が屋敷に訪れて、物語は大きく動き始めるのです。

姉様、姉様、お客様が来たらしいのです！

ラム「朝に弱すぎる可愛い可愛いシャルを起こすにはどうしたらいいのかしら、レムはどう思う？」

ラムは少し困ったようにレムに尋ねる。レムはレムで困ったように、しかしほのかに顔を赤らめてこう言う。

レム「そうですね、朝に弱すぎる可愛い可愛いシャルを起こすのは非常に難しいです。しかし、姉様ここはもう揺すってでも起こすしか方法はありません。」

ラム「そうね。それしかないわ、じゃあレム私は右からレムは左から揺すりましょう。」

ラムは同意して、せーの、で2人はシャルを揺する。するとシャルは寝ぼけたように、目を覚ましてこう言った。

シャル「あれぇ、ラムねーさまとレムねーさまがたくさんら～～～、えへへ～、たくさんなれなれしてもらうんら～‼？」

そう！シャルという少年は朝に非常に弱く、滑舌が絶望的に死んでいるのだ‼？さらに寝ぼけてすぎてレムとラムが沢山いるなどとよくわからないことをいっているのだ

！ついでに言うならこの状態のシャルは何時にも増して甘えん坊になるのだ‼？

その容姿は、サラサラとした金髪に紅い眼、雪のように白い肌、１００人が見たら１００人が振り返りお姫様だと思ってしまうような整った顔、さらにその声は非常に透き通っており、聴く者を惚けさせるほどである。その純真無垢、容姿端麗、と挙げればキリがないほどに美しく可憐で儚げな美貌を持つ者が少年なのだ。もう一度言おう、少年なのだ‼？‼？‼？

事実、姉であるレムとラムですらシャルが可愛い過ぎて頬をこれでもかというくらいに赤く染めている。

レム「姉様、姉様、シャルが可愛すぎて襲ってしまいそうです、」

ラム「レム、レム、私もシャルが可愛すぎて襲ってしまいそうよ、」

姉が弟に向けるようなものではないような危ない顔をしている、しかしそこは流石の精神力でなんとか平常心へと持っていきシャルの目を完全に覚まさせる。

ラム「シャル、しっかりして。お客様がお見えになってるから。」

レム「シャル、しっかりしてください。お客様がお見えになっていますよ。」

２人はもっとこんなシャルを見ていたいという気持ちを押さえて言った。すると、シャルも徐々に目を覚ましていき、

シャル「レム姉様、ラム姉様おはようございますなのです。お客様がお見えになって

るのです？」

「「ええ（はい）」」

シャル「それは、大変なのです！直ぐに着替えるので部屋の外ですこし待っておいて欲しいのです。」

シャルはシャルで独特な喋り方でこう言ったのだった。しかし、ふと部屋を見渡すといつもと違うところがある事に気付いた。

シャル「レム姉様、ラム姉様なんで今日はメイド服が置かれているのです？いつもは執事服なのに何かあったのです？」

ラムは何事も無いかのように言う。

ラム「理由は簡単よ、黒髪の変な男性のお客様をお迎えする時はこういう格好になって、女の子のふりをして過ごすというのができる使用人なのよ。」

普通の人が聞けば何を言っているんだと思うような事だ。しかし、このシャルという少年は自分の尊敬し敬愛する姉達の言うことは絶対正しいと思っており、さらに純粋すぎる性格と、天然すぎる性格との３つの要素が混ざり合い疑うということなど全くしないのである！

シャル「そうだったのです‼？流石はラム姉様なのです！シャルはこれでまた１つ賢くなったのです‼？恥ずかしいけど頑張って女の子になりきってバレないようにする

のです！」

シャルのこの言葉を聞きレムはこう思ったのだ。

レム（やっぱりシャルは可愛いです‼？恥ずかしがってるシャルも、得意げにしているシャルも全てが愛おしいです！いよいよ、どこの誰とも知れない者にシャルを渡すわけにはいかなくなりましたね。やはり私と姉様がシャルと結婚するしか……）

などと見当違いなことを考えていた。そうしてシャルはメイド服に着替えて3人はお客様のいる部屋に行ったのだった。部屋に入ってみてもまだ客人は起きていなかった。しかし、レムは部屋に入った途端ある1つのことに気がついたのだ。

レム（このお客様、何故魔女の残り香が？？？これは早々に片付けなくてはならないかも知れませんね。）

少し顔を暗くしたレムは未だ起きぬ客人に対しこう思っていたのだった。